

■ユキノBF

(ふう……長いお仕事でした。やはり帰還が遅くなってしまいましたね)

大陸で一度は覇を唱えた強豪ギルド「剣咬の虎」のメンバー、ユキノ・アグリア。この日も実力を買われて依頼を受けたのだが、辺境での依頼だったため、この日はギルドへの帰還が遅れてしまった。

一息つき、帰宅しようとするユキノだが、そこに一人の女が話しかける。

「ユキノさん、一人ですか？ よかったら一緒に帰りませんか？ 実はステキなバー見つけたんですよー♪」

実力を買われて「剣咬の虎」に入った新人の女魔導士、カズミだ。

彼女は加入してでギルド内に知り合いが少なく、そのことで少し悩んでいたのを知るユキノは快く承諾。

「私でよければ、よろこんで」

裏表のないユキノは屈託のない笑顔を見せるが……純真さゆえに、カズミが邪念で笑みを作ったことに気付かない。

「よかったー！ きっと気に入ると思いますよー♪ 特にユキノさんみたいな方には……♪」

自分の好みを察してのことか、と何の警戒もなくついていくユキノ。

夜の街に関しては彼女の方が詳しく、通ったこともない裏道を過ぎ、妖しげな雰囲気のある酒場につく。

「お、オトナな雰囲気ですね……」

「怖がらなくていいですよ、取って食ったりしませんから♪ あ、でもメニューはわかりませんよね……オススメがあるんで一杯目はおごりますね♪」

「そんな……え、もう？ じゃあ、そこまで言うなら……いただきます♪」

飲みやすいカクテルを出され、挨拶代わりに乾杯。

注がれたのは少量であるため、一口二口で飲み干すが……

「んっ……美味しいですね。オススメするだけは……あれ？

これ、そんなに強くない、はずじゃ……すみません、もう……酔いが、回っ……て……」

途端に身体が火照り、強い眠気に襲われる。

少量のアルコールでこれほど酔ったことはなく、仮に酔いが回ったとしても不自然な早さ。

何が起きたのか知る由もなく、ユキノはテーブルに身体を預けて深い眠りに落ちてしまう……

「……………っ?!　ここは……?」

目覚めると、ユキノはどことも知れぬ部屋のベッドにいた。
しかも着ていた服がなくなって下着しか残っておらず、部屋には見知らぬ男までいたため、小さく悲鳴を上げてしまう。

「えっ?　そんな、服が……きゃあっ?!　あ、あなた誰ですか!?　ここは一体……?」

羞恥心で身体を隠しつつ、戦闘態勢に入ろうとするユキノ。
しかし男と目が合った瞬間、身体が思うように動かず、力が抜けてしまう。

【あー、見て分かんねえか?　売春宿だよ、しかも闇系のな】

「なっ、売春宿……っ?!　まさか、カズミ様も?!　カズミ様はどちらにいますか!」

【人の心配するより自分の心配しなよ。ま、術式でろくな抵抗もできねえだろうけど】

「くっ……ち、力が、入らない……!　っ、おやめなさい、触らないでっ!」

【手え出すなって言われてるけど……拉致するのだから手間なんだぜ?　オーナーが来るまでこっちも楽しませろっての!】

周囲を見ると、巧妙かつ緻密に魔力が張り巡らされており、かなり強力な術式魔法がかかけられているのが分かった。おそらく、女性や敵対者の能力を低下させるように仕組んでいるのだろう。

強豪ギルド「剣咬の虎」の上位に属する以上、最低限以上の体術も学んでいるユキノだが、これでは格下の男にすら手も足も出ない。

軽薄な男はベッドに上がり、ユキノに手を伸ばそうと厭らしく下品な目で近寄って来る。

男が口を滑らせたことで、自分が売春宿に拉致されたと知ったユキノだが、同時に同じギルドの仲間であるカズミの方が心配になる。

「やはり、私とカズミ様はあなたたちに……!　目的は何ですか?

私はどうなっても構いません。その代わりに、カズミ様だけは助けてください!」

【は?　まだ気づいてない?　騙されたんだよアンタ】

「な、何を言って……」

ずりゅっ!

「ああっ!」

男の言葉がすぐに理解できず、しかも男の手がブラ越しに胸に触れ、混乱と羞恥で再び悲鳴。
胸の形を歪められてもまともに抵抗できず、為すが儘に触られ続ける内、更に身体に異変が起きる。

【新参のくせに辺鄙なバーに誘うとか、おかしいと思わなかったか？ カズミは俺らとグルなんだよ……おー、やっぱ胸でっけえ】

むにゅっ♡ ぎゅむうっ♡

「そんな……カズミ様は、私たちの仲間……あっ♡ お、おやめ、なさいっ♡」

【おお、感度いーじゃん♪ これ術式だけのせいかな？ アンタ割と敏感なんじゃね♪】

「そ、そんなことはっ！ ああっ♡ お、お願いします……カズミ様を、早く……っ♡」

【だから、あいつは元々俺らの一味、宿のメンバーなんだよ！】

ずむっ♡ ぐにっ♡ もみもみもみっ♡

「違います♡ カズミ様はっ♡ 「剣咬の虎」の仲間……あくうっ♡」

揉まれた胸が急に熱を発し、拒絶の声が甘く蕩けたような響きになる。

媚薬でも使ったかのような肉の疼き。

おそらく術式の影響だが、力が抜けて快樂もカズミの件も強く否定しきれない。

身体がどうなっているのかを教えるように、下着から浮き出た乳首が見せ付けられ、鞅轡にこねくり回され、ユキノは今までに感じたことのない欲熱に晒される。

【そう言いつつ乳首ビンビンになってるぜ？ 仲間とかどうでもよくなるくらい感じまくってんだろ！】

ぎゅむんっ♡ びんっ♡ くりくりくりくりっ♡

「違うっ♡ 違いますっ♡ ああああ……っ♡♡」

【おもしれえぐらい善がってんな。ここも触ったらどうなるかな……！】

ぬちゅっ♡

「ひっ♡」

【もうパンツまでびしょびしょじゃねーか！ もう準備はいいな……まず一回イッとけっ！】

「やめてっ♡ やめてくださいっ♡ そんなとこっつけませんっ♡ ああ……♡」

ぐちゅんっ♡ くりっ♡ ぐちゅうっ♡ ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅっ♡

びくんっ♡♡ プッシャアッ♡♡

「あ♡♡ ああっ♡♡ そんな♡♡ 激し……っああっ♡♡

あああああああ……っ♡♡」

トドメとばかりに男のもう一つの手が下に伸びる。

パンツの中に潜り込んだ指が秘唇に触れ、その時の感触ではっきりと発情を自覚させられる。

混乱の中、男の慣れた指使いに何もできず、むしろ腰を合わせてしまい……気付いた時には、意識を奪うほどの快感の衝撃を受け、ユキノは軽く安心してしまう。

(い……今、私は……♥♥ そんな……ありえない……っ♥♥)

【おーおーあっさりイッたな？ 「剣咬の虎」トップクラスの魔導士がこんな敏感の淫乱とは思わなかったぜ】

「ああ……♥♥ 違います……私、は……っ♥♥」

邪な男だが、いかにも女慣れして経験豊富そうな彼に言われれば、本当にそうなのではないかと疑ってしまう。

疑念がまたユキノの動きを鈍らせ、ついに男に覆い被さられてしまう。

【イッパツだけだ……すぐ済ませるからいいよなあ？】

「え……？ な、何を……ああっ？！」

男の腰がユキノの腰に密着している。

嫌でも下着越しに熱が伝わり、彼が雄として猛っているというのが——これから何をしようとしているのかが理解できてしまう。

悲鳴を上げる前に下着がズリ下ろされ、大事な部分が晒される。

それだけでも耐えがたいというのに、更に男はぐっと腰に力を入れ、自らの性器も露出させ……

【ビビんなくてもいいだろ……もっと気持ち良くしてやるんだからよお！】

ぐちゅ……♥

「ひっ♥ い、いやっ♥ ああああ……っ！」

恐怖と本能の昂りが混ざった叫びを上げた時だった。

また別の男が唐突に部屋へ入り、その瞬間に男は顔色を変えてユキノから離れる。

【何してんだてめえ】

【あ、いや、すいませんオーナー。こいつが大人しくしないもので……】

スタッフの男が慌てて対応する、オーナーと呼ばれた相手。

ユキノはその顔に見覚えがあった。かつて「剣咬の虎」の元メンバーだった実力者なのだ。

彼の名を呼ぼうとするユキノだが……

「あなたは……マスター様！ ……えっ？ 私、どうして……」

【俺への呼び方は術式で変えてある。……くく、今日から俺がお前の『マスター』だ】

名の代わりにマスター、しかも様付けで呼んでしまう。

呼称やスタッフの態度から、彼が自分を捉えたグループのトップだと推測できる。

まさかかつての仲間がこんな卑劣な犯罪者になり、しかもそんな彼をマスター様などと呼ぶことになるとは思わず、ユキノは屈辱と怒りで『マスター』を睨み付ける。

「まさかギルドを抜けたあなたが、こんなことをしていたなんて……」

かつてはギルドのマスター候補のお一人だった方とは思えない有り様ですね」

【言ってくれるなあ……やってることのエグさは昔の「剣咬の虎」とそう変わらねえと思うがな？ 勝手に命懸けの決闘ふっかけて無様に惨敗したユキノさんよお？】

「っ！ あ、あれは……」

ぎゅむんっ♡

「ああっ♡ く、口を、閉じなさい……っ♡」

隙を見せた瞬間、今度は彼によって胸を揉まれる。

すっかり熱を帯びて準備できていたため即座に感じてしまう。

術式により抵抗もできないが、ユキノは肩を震わせながら気丈に睨みつける。

【何だお前、見た目以上に敏感だな。くく、そこまで感度上がる術式じゃないんだがなあ……？】

「な、何も感じてなど、いませんっ……♡ 早く、手を……離し、なさい……っ♡」

びくびくと身体が震える様子を楽しみながら、オーナーは愛撫と話を続ける。

【さっきも言ったろ、今は俺がお前のマスターだ。この宿に來たからには、きっちり娼婦として働いてもらう】

「娼婦だなんて……っ♡ そんなこと、できるわけ……♡」

【だよなあ？ だからチャンスをやろよ。バトルファックでウチのモンに勝てたら逃がしてやってもいいぜ？】

「バトル……？ な、何ですか、それは？」

【セックス勝負だよ！ 互いにイカせ合ってズタボロになるまでやり合うオトナのゲームさ】

「セッ……♡ そんな、バカげてます♡」

【じゃあ娼婦行きだな。ついでにこいつも没収したままだが……】

「それは……私の鍵！」

娼婦になりたくなければ、セックス勝負……バトルファックで勝てというオーナー。

理不尽な取引を持ち掛けられ、しかも男性経験もほとんどないユキノは羞恥心から拒むが、こうなると分かっていたとばかりにオーナーは鍵を取り出す。

それはユキノの星霊の鍵。大切な仲間を天秤にかけられては選択肢などなく、ユキノは渋々にバトルファックでの賭け勝負を契約させられる。

【やるなら勝敗に関係なく返してやる。それでも受けないか？】

「卑劣な！ ……分かりました、受けて立ちます。そして、やるからには必ず勝ってみせます！」

【よし、契約成立だ】

同意を得たことで、ユキノとオーナーの身体に同じ模様の紋章が浮かぶ。
術式による、契約を遵守させるため行動を制限する魔法だ。
更にオーナーが指を弾くと、ユキノは服が青いチャイナドレスに変化。
部屋も内装が変わり、小さな闘技場を思わせる仕様となる。

「これは……」

【術式使いの館だ、これくらいはできて当然だろ。さ、準備が出来次第 始めるぞ……これを楽しみにしてる
奴も多いからなあ】

◆BF（バトルファック）

（まさか、こんなことになるなんて……）

マスタージェンマ失脚の折に脱退したが、オーナーの彼はかつて「剣咬の虎」でも有数の実力者だった。主に術式魔術を得意とする男で、宿の術式は彼が仕込んだのだろう。

総合力では黄道十二門を扱うユキノに劣るものの、将来を有望視されていたのだが……こんな形で立場が逆転されるとは思わなかった。

（何としても、私の仲間を取り返さなければ……！ この勝負、必ず……勝ちます……！）

経験のないユキノに勝算などあるはずもないが、それでも退くわけにはいかない。スタッフにより行動制限の術式を解除されると、準備された小さなリングに上がる。

【うおお、もしかして今度の新人はあのユキノか】【ドレスえっろ！】

【あの大会でポロ負けした人じゃん。また無様な負けっぷり見せてくれよー♪】

「っ……私は負けませんっ！」

開いた谷間の穴、深いスリットから覗く太股が視姦され、赤くなりながら強気に返すユキノ。対戦相手と対峙するが……

「えっ？ こ、この方が、お相手ですか？」

【その言い方は酷いなあ……これでも結構、経験豊富なんだよ？】

ユキノの対戦相手は、どう見ても年下の少年。

オーナーのような人物が来ると思っていたユキノは呆気にとられてしまう。

だが、同時に勝機も見出せる。経験豊富を自称する少年だが、背丈はユキノより頭一つほど低く、体格的にも引き締まってはいるが、極端に鍛えているわけではない。

体術に関してはユキノの方が勝っているはず。性の競技など考えたこともなかったが、これなら可能性はゼロではない。

『今回のカードは「剣咬の虎」の上位メンバー、ユキノ！

対するは我がエースの一角、コードネーム・キッド！

ルールはKOか半判定まで続けるノーラウンドのエンドレス制！ レディ……』

合図と共にゴングが鳴り、試合開始。

性の勝負と聞き、経験がないなりに、どんな内容になるのか想像はつくが……まずは相手の出方を見るため、距離を保って構える。

(体力とリーチではこちらが有利。彼の出方を見て、隙ができればそこから……)

【ユキノさん、硬いなあ……やっぱり緊張してる？ もっとリラックスした方がいいよ♪】

ユキノの考えを見透かしたようにせせら嗤うと、少年はトランクスのスリットからペニスを露出させる。

【ほら、これくらい堂々とできるくらいにさ！】

ぼろんっ！

「！！」

(お……！ 大きい……！)

『キッド、ペニスを見せて挑発！ リラックスしているが、ペニスはガチガチの巨根だ——！ ユキノは逆に顔を真っ赤にさせて動けない！』

少年はBFそのものを楽しんでいるのか、いきなり性器を見せ付けるという行為に出る。

小柄な少年のものとは思えない、絵に描いたような男根を前に、ユキノは余計に羞恥心を感じてしまう。

(ど……どうすれば……？ おちん……性器は、やはり性感帯、弱点のはず……み、見せ付けるということは、耐久性に自信が……？ で、ですが……)

堂々とする少年に対し、どうしていいかわからない。

ユキノは露骨に胸を隠しながら恐る恐る近付き、先に責めようとするが……隙だらけであり、少年が先に胸目がけて手を伸ばす。

「ひっ——！」

(危ないっ！ 胸だけは守らないと……隙ができた今の内に！)

スタッフやオーナーに触れられた時の記憶がよぎり、息を飲んで回避。

男に触られるのはやはり恥ずかしく、恐ろしい。負の感情から逃げるためにも、触れられる前に自分から責めるしかない。

そう考えたユキノは、少年が敢えて隙を作ったとも知らずに後ろから組み付き、手を回してペニスを触ろうとする。

『逃げ腰だったが、素早く回り込んだ！ やはり体捌きは流石！ バックを取り、手コキで責める！』

「し……失礼しますっ！」

ぬる……っ♥

「ひっ……」

ぬちゅっ♥ ぬるっ……♥

「ど、どうですかっ？ こうすると、き、気持ち良いのですよねっ？ は、早く……降参してくださいっ！」

(やっぱり……お、大きくて硬くて……あ、熱い……！ 早く終わってください……っ！)

必死なあまりに降参を促すが、圧倒的実力があるなら余裕の態度になるものの、拙いテクニックではただの懇願でしかない。

【あれ、「剣咬の虎」にしては随分大人しいってどうか、素人丸出しだね。もしかして経験ほとんどない？】

「っ？！ す……すみません……で、ですが、このようなことは、はじめてで……！」

少年はクスリと笑い、ユキノの経験の浅さを見抜く。

対し、ユキノは羞恥を隠そうともしない。

ここまで来れば逆に新鮮なカー一部からは冷やかし気味ではあるが応援する声も出るほどだ。

【デビュー戦の相手ってことか。なるほど、オーナーも性格悪いなあ。ま、がんばってね】

ぎゅむっ♥

「ど、どうも……ああっ♥」

少年が後ろ向きに手を伸ばし、ユキノの尻を揉む。

驚いた隙に少年が向き直り、再び正面に向き合うとすかさず胸に手を伸ばす。

今度ばかりは逃げられず、抱きつくような揉みしだきにユキノは堪らず声を上げる。

「ああっ♥ そんな、ダメです……あ♥ は、離して……あっ♥」

【ほらほら、責めないと勝てないよ？ それとも気持ち良すぎて反撃できない？】

「そ、そんなこと……んっ♥ ありませんっ♥」

(そうだ……責めないと♥ 勝たないと、娼婦に……それだけはっ♥)

にちゅっ♥ ぎゅうっ♥

「この試合、負けれないんです……♥ か、勝たせてもらいますっ♥」

『手コキ v s 乳揉み妨害！ しかし明らかにユキノの責めが弱い！ これで精液は出させられるのか？！』

「だ、出させてみせます！」

がしっ♥

「ああっ♥」

【その前に自分が感じすぎでしょ♪】

『演出を優先させた、モーションの大きな愛撫！ 序盤ではダメージはないはずだが、思いのほか効いたか！』

「き、効いてません♥ こ、このくらい……」

もみっ♥

「あはあっ♥」

【全然耐えてないじゃん♪ 勝たなきゃいけないんでしょ、ほらほらがんばりなよ♪】

もみゅっ♥ むにゅんっ♥ ぎゅううっ♥

「わ……♥ 私は……♥ 諦め……ません……んんんっ♥」

『乳揉みに喘ぐユキノ、手コキが全く進んでいない——！』

たふっ♥ ぷるんっ♥

「あっ♥ ああっ♥」

こりっ♥ ぎゅううっ♥

「んひいいいっ♥♥」

『更に勃起乳首を摘ままれ小さな悲鳴！ これは脚に来ているか、腰まで震える——！』

【胸だけでも弱いのに、乳首となると更に敏感なんだねー♪ 弱点わかりやすっ♪】

「そ……♥♥ そんなとこ……♥♥ 弱く、なんか……っ♥♥」

きゅうっ♥

「ああああっ♥♥」

(ダメ♥♥ イッてはいけないのに♥♥ また、あの時みたいに……♥♥)

いつの間にか乳首が硬く尖っており、胸への愛撫だけで昂っているところに何度も搾られては、発熱が完全に許容量を超過。

乳首だけは固定したまま豊満な胸を揺らし、腰を震わせ……

【まず一回、イっちゃえっ♪】

ぎゅうっ♥ ぎゅりいいいっ♥

「ダメですっ♥♥ また♥♥ 何か……キてますううっ♥♥」

びくっ♥♥ びくんっ♥♥

「ああっ♥♥ あ♥♥ あふあああああ……っ♥♥」

拉致した男に触られた時以上の、痛烈なまでの快感が全身に走り抜け、ユキノは電流を受けたように仰け反ってしまう。

『絶頂——！ 胸だけでイッてしまったー！ 同じパターンは数あれど、あまりに早い絶頂！ これは娼婦化確定か——？』

「そ……♥♥ そん……な……っ♥♥」

(こ、こんなに簡単に……イッてしまうなんて♥♥ このままでは私♥♥ 本当に、娼婦に……♥♥)

【チンポに降参しなよ♪】

「降参なんてしませんっ♥♥ もう……♥♥ 今度こそ……♥♥」

——……

「あっ♥♥ あっ♥♥ あっ♥♥ あっはあんっ♥♥」

「おっ♥♥♥ 奥っ♥♥♥ また……ああああっ♥♥♥」

「イキません♥♥ イカない……♥♥ イカないっ♥♥」

「イッたり♥♥ しませんんっ♥♥ もう♥♥ 二度とっ♥♥」

「イツ………く♥♥♥ イクっ♥♥♥ イクうううう——っ♥♥♥」

「違うんですっ♥♥ 今のはああっ♥♥」

「あはああ——っ♥♥ 奥っ♥♥ 子宮はっ♥♥ もう……らめえええっ♥♥」

「いやああっ♥♥♥ イックううううううっ♥♥♥」

『ズタボロにされ続けるユキノ！ もはやイキっぱなしの状態だ——！』

【いくら粘っても無駄だよ♪ さっさとオチンポ様に降参しなっ♪】

「おっ♥♥ おちんぼっ♥♥ おちんぼ様っ♥♥ 降参……なんてえっ♥♥」

ずぼずぼずぼずぼっ♥ ごぶごぶごぶごぶううっ♥

「イクッ♥♥♥ いくうっ♥♥♥ おちんぼ様にいいっ♥♥♥」